

## 世代の違いによる備蓄知識・行動や情報活用の実態 ～令和4年度 災害時の食の備え県民調査～

鳥取県栄養士会 調査研究部 ○三嶋碧 森本美由紀 河原千明

澤 裕子 船原千恵子 星野佳菜恵

鳥取大学医学部保健学科 上田悦子 野坂奈緒美 藤田宏美

### 【目的】

栄養士会では継続的に「災害時の食の備え」に関する県民調査を行い、その結果を参考に啓発活動を行っている。前回調査では、循環備蓄の知識の有無が備蓄実践に影響を与え、年代により活用する情報媒体が異なることが示された。そこで今回は最新調査を基に、現役世代(以下、60歳未満)と地域活動が主となる世代(以下、60歳以上)で、災害体験の違いや備蓄知識と実践の関連、情報収集に注目した分析を行い、今後の情報発信の課題を明らかにすることを目的とした。

### 【方法】

2022年8月～11月に、18歳以上の鳥取県民を対象にアンケート調査を行った。Webまたは紙媒体での提出をもって同意取得とし、1063名の回答が得られた。データはExcelで集計し、EZRにて解析した。分析項目は、「災害時の食の備え」に関する知識と行動の実態、情報活用等である。

### 【結果】

災害経験割合が最も高かったのは、両方の群とも「地震」であった。「台風・暴風雨・豪雨」等では60歳以上が有意に高く、災害経験「無し」の回答は60歳未満が有意に高かった(図1)。

「ローリングストック」の「言葉も内容も知っていた」のは60歳未満で41.7%、60歳以上では43.3%だった(図2)。またその実践に関して、「実践している」と「十分ではないが実践している」を合わせた回答割合は、どちらの群も5割以下だった(図3)。

災害時の食の困り感で「食材備蓄確保」は、「どちらかという困る+とても困る」のは60歳未満で73.6%、60歳以上で54.0%と、有意な差が認められた(図4①)。「自身で調理をすること」について、「どちらかという困る+とても困る」のは60歳未満で47.8%、60歳以上で38.6%と有意な差が認められた(図4②)。

「災害時の食の備え」情報で「テレビ・ラジオ」等はどちらも活用経験割合が高く、60歳未満では「学校教育」「職場」「行政」、60歳以上では「地域」「行政」の方が高かった。「食の専門家」情報の利用はどちらも1割程度だった(図5)。

今後活用したい情報源として、「学校教育」「職場」「メルマガ等配信・SNS」は60歳未満の方が有意に高く、「テレビ・ラジオ」「新聞・雑誌」「地域」「行政」は60歳以上の方が高かった(図6)。「食の専門家」情報はどちらも25%程度が活用したいと回答した。

### 【考察】

災害経験割合は60歳以上の方が高かったが、循環備蓄の知識や実践には差は認められなかった。一方、調理することや食材確保などの困り感は、60歳以上の方が低く、経験も踏まえ災害時の対応は可能、と考えている人が多いことが伺える。また、食防災に関する情報源の活用の違いが見られることから、それぞれに合わせた啓発活動が必要である。残念ながら「食の専門家」情報の利用は低いが、60歳以上の方は地域や行政からの情報への期待が高いことから、これら機関と連携し、会員が活動する場で工夫し啓発すれば、県民の備蓄意欲や実践の向上につながると思われる。

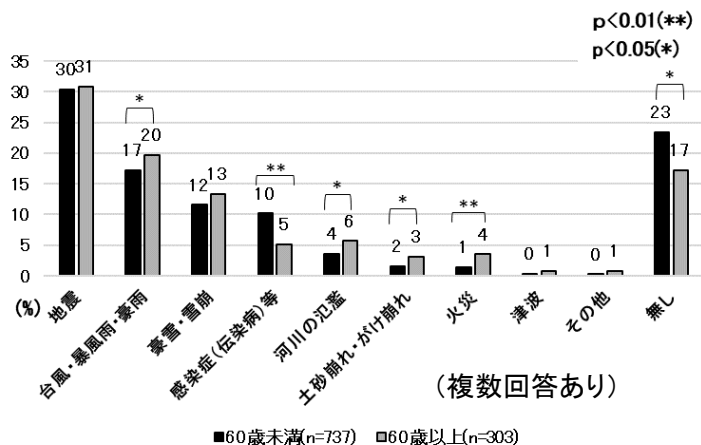


図1 災害経験

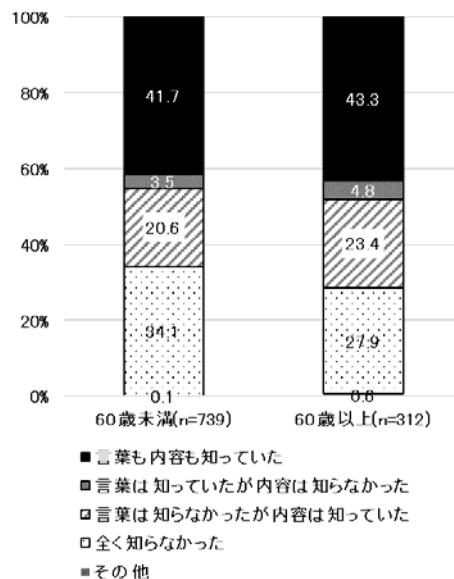


図2 ローリングストックの知識の有無

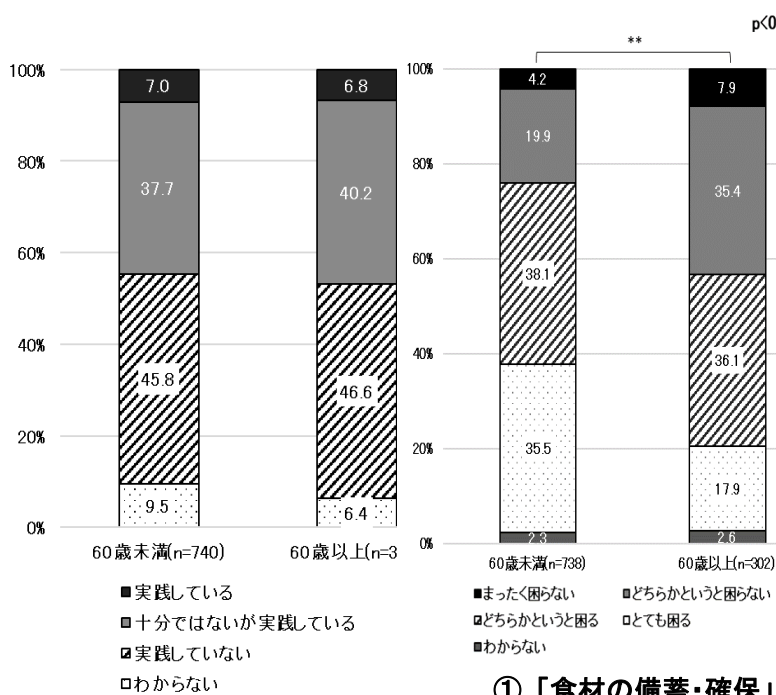


図3 ローリングストックの実践経験

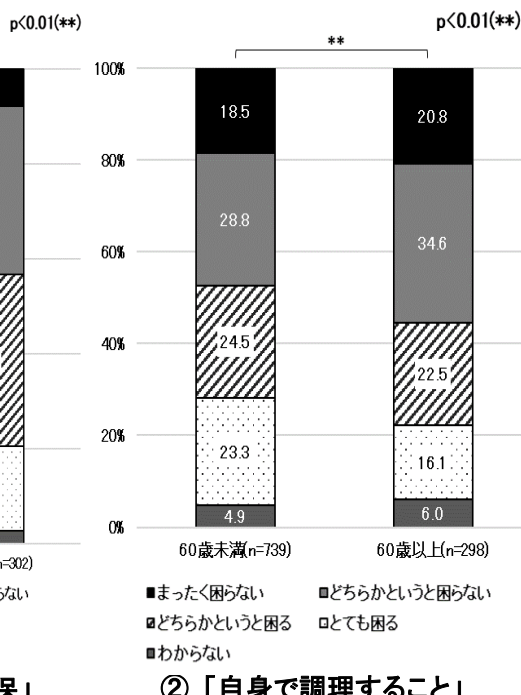


図4 災害時の食の困り感

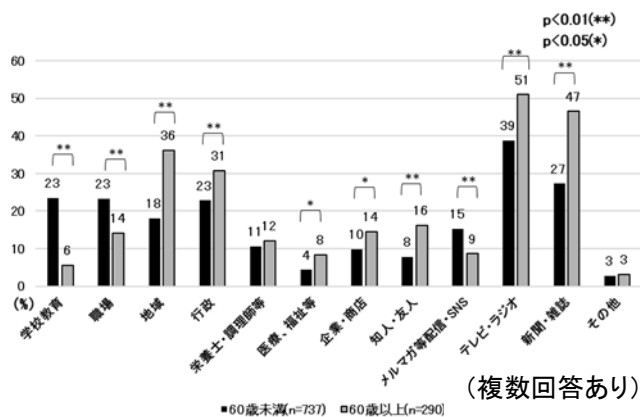


図5 活用経験がある災害時の食の備え情報源

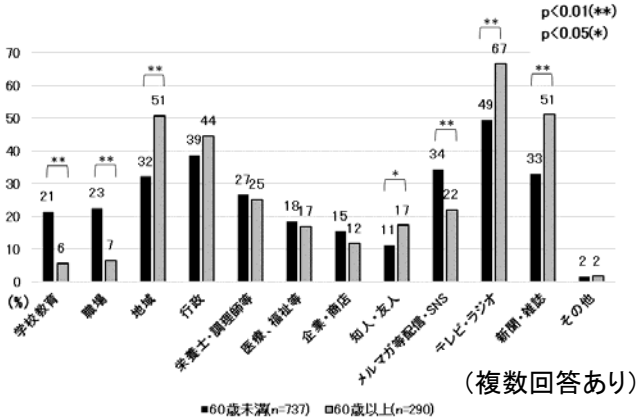


図6 今後活用したい災害時の食の備え情報源